長澤 泰
ハピネスライフ財団　理事長
東京大学・工学院大学 名誉教授

アフターコロナの病院・福祉施設の家具について

明治時代の前半に、コレラや結核が流行しました。患者を隔離するために「避病院」を建てたのが日本の病院のはじまりです。ただ、有効な治療法もなく、家族との面会も禁じて劣悪な隔離環境で収容したので、大変評判が悪くコレラ一揆も発生するほどでした。

戦後は、医療・公衆衛生水準向上の結果、伝染病患者が激減しました。感染症の診療は過去のものとなり、診療の重点はガンを含めて生活習慣病対策へ移行しました。結果的に多くの患者さんの生命が救われ、長寿を実現しています。

しかし、今回の新型コロナウイルス（Covid-19）の世界的大流行は今後の病院・福祉施設のあり方について考える良いきっかけになりました。

われわれの知る「病院」は20世紀後半に成立したものです。外来・検査・放射線・手術部門が中央集中型になり、貴重な専門スタッフが効率よく仕事ができるようになりました。しかし、外来では「3時間待ちの3分診療」と言われ、大勢が殺到し長椅子に座って待つ状況が発生しました。また、患者さんは検査など各部門を巡り、それぞれで待つ事態が発生しました。

このような状況を見た時、「病院」は身体の修理工場のような「病気の館」になっていたのではないかと気づきました。実際に、身体的な病状は快復しても、精神的な癒しは得られていない現状がみられます。従って、これからは健康になる為の「健院」が必要であると思います。このことは、決して、今の病院の存在を否定している訳ではありません。今回も基礎疾患を持つ高齢者や乳児は、感染すると重症化するリスクがあるため、重点的なケアを必要としました。病院は何処に在っても何時の時代でも、病人にとっては「あそこに行けば助かる」という闇の中の灯台です。従ってこれからの病院は、救急・ICUの機能をより充実させる必要があります。

病院建築の面からいえば個室の不足が問題でした。「個室は贅沢だ」という古い考えを未だに引きずっています。明治時代の有料病院は個室中心で、一方無料の慈善病院は大部屋中心でした。ですから個室は金持ちが入る所で、大部屋が普通だと思いこんでしまったのです。近年、日本でも全個室病院が増えています。アフターコロナの時代は、Covid-19の患者さんも数多く受け入れることができる全個室病院が普通になるでしょう。

Covid-19の流行により、外来待合の長椅子は一つおきに座る状況になりました。ここに紹介されている待合チェアーは、感染防止と快適性を重視した製品です。個室では、家具が重要な役割を担います。患者さん・訪問客・付き添い用のスリーパーチェアは快適な入院環境を実現します。「健康デザイン」をテーマにした家具メーカー、「ナゼロ株式会社」による「アフターコロナの病院・福祉家具」の開発を期待します。